そろそろ家に帰りたいです

ぽち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そろそろ家に帰りたいです

【Ｎコード】
Ｎ３９８４Ｕ

【作者名】
ぽち

【あらすじ】
異世界に召喚されて魔人を封印して来いと言われた。
言われた通りに封印してきたけれど・・・？

０１__体育座りで森の中

木々の間を吹きぬけるそよ風、枝葉の間からこぼれる木漏れ日は今日が大変良い天気であることを物語っている。

俺の心はぜんっぜん晴れてないけどね！！

森の中に滾々と湧き出る水を湛える泉の前で体育座りをし、思いっきりため息を吐いてしまう。

あーもう。

こんな時じゃなかったら「ひゃっほー！魚いっるかなー！！」とか言ってテンションだだ上がりなんだけどなー。

若干涙目になっているのに気付かないように左腕についている太陽電池時計を見る。

現在時刻１２時。

少し前まで城の謁見の間にいたのにどうしてこうなったんだろう。

02_回想

午前１１時。
旅から帰った報告をするために王城の謁見の間に行った。
謁見の間には一緒に旅をしてくれた剣士と魔法使いも着いてきてくれたんだよね。

謁見の間に入ると、すでに王様率いる見た目キラッキラしていたり、厳かな雰囲気を醸し出している仰々しいメンバーが勢ぞろい。
王様の前まで歩み出て膝を着く。
・・・初めて王様に会った時にどうしたらいいか分からなくて突っ立っていたら
衛兵に思いっきり張り倒されたことも今ではいい思い出・・・でもないな。うん。

「よくぞ戻った、異世界からの来訪者よ！」

そう。この王様の言葉で分るとおり、俺はこの世界の人間じゃない。
普通に中学２年生で、友達とふざけたりなんだかんだしていた普通の人間。
よくゲームであるようなハイスペック野郎でもなんでもない。

そんな俺が学校の授業中に居眠りしてたらいつの間にかココにいた。
最初は手の込んだビックリだなー。
とか思ってたけど、スパルタ式の訓練が始まった時にはマジで異世界なんだって思った。
生ぬるく生きてきたんで危機感ないんですよ。本当に。
異世界に召喚され、スパルタ特訓後に監視（キモチワルイ目みたい

な変なヤツ）付きで城をほっぽり出され、
どうにかこの世界の人たちの言う危険な存在”魔人”を封印できた
（俺なんにも出来なかったけど）

「噂にも聞いておる。無事に魔人を封印したそうだな。」
「は・・・はい。みんなのおかげです。」
「いや、そなたも骨を折ったろう。謙遜するでない。」

返事をしなくても衛兵に殴られ、
変な返答をしても衛兵に殴られるからあんまり安易に言葉を発せられない。
でも、これだけは・・・！

「魔人を封印する事が出来たので、約束どおりに・・・！」
「うむ、我が娘。第2王女であるカトリーナとそなたの式を挙げようぞ！」
「・・・・え？」

しきってなに？
指先の感覚が無くなっていく。だけど聞かなければ。

「陛下、申し訳ありません。”しき”とは一体・・・？」
「何をいっておる！そなたと王女の結婚式ではないか！」

周りの仰々しいメンバーも当然っていう顔をしている。
いつの間にそんな話になったの？
俺、魔人を封印したら元の世界に、家に帰してもらえるって。
旅に出る前に謁見の間＞ココ＜で王様に会った時も、
「無事に魔人を封印したら元の世界に戻してやる」って言ってたのに！

「っ・・・！そんな話」
聞いてない！って叫ぼうとしたら背後から耳を劈く爆音と、一瞬遅れて室内に土煙が舞った。

反射的に床に伏せて、パラパラと頭上から落ちてくる何かから頭を守る。
恐る恐る目を開けると、先ほどまで綺麗な絨毯がひかれていた床は無残にも汚れていて、
その床に仰々しいメンバーが倒れているのが分った。

何が起こったのかと床に伏せたまま後ろを振り返る。
舞っていた土煙もひと段落していたようで、何が起きたのか、何が居るのか分った。

謁見の間の壁は突き破られ、外からの光が差し込んでいた。
その突き破られた壁に見える一つの影。
大人４人を積み上げた程の体躯、鋭い鉤爪、艶やかな緑色に煌めくウロコ、背中の１対の羽。
それはどこからどう見ても、

「ミドリ・・・ちゃん？」

俺の大事な相棒であり、初めてこの世界で出来た俺の仲間のドラゴンだった。

城をほっぽり出されてすぐ、街道で魔獣に襲われた時に迷い込んだ森でであったドラゴンがミドリちゃん。
魔獣に追いかけられ（このとき、監視でついてきたキモチワルイ目みたいな変なヤツは魔獣に喰われた）、

一生懸命逃げている時に小さいドラゴンがピーピーか細く鳴いているのを見つけたんだよね。
このままじゃこの小さいのも食べられちゃう！って思わず抱きしめて森の中を逃げ惑った。
結局、追いかけてきた魔獣は撒けたけど、俺たちは少し深い斜面みたいなところで足を滑らせて一緒に落ちた。

俺、ズタボロ。小さいドラゴン無事。
なんていう情けない状態で、俺って本当にツイてない。でも小さいのが無事でいいか。
とか考えていると、小さいドラゴンがズタボロの俺の傷を治してくれた。
魔法が使えるなんて、なんというハイスペック。

動けるようになって礼を言うと旅を続けようとしたらこの小さいドラゴンが着いて来るようになった。
追い払っても着いて来る。
正座して真剣に「危険な旅になりそうだからお家（？）に帰りなさい。」と言ってもまったく意に返さず着いて来る。
最終的にはウロコの色から「ミドリちゃん」っていう名前を付けていっしょに旅をすることになった。

後日、喋れることようになったミドリちゃんと色々話をした。
元の世界のこと、ここに召喚されたこと、魔人を倒さないと家に帰れないことなど、
俺の事でミドリちゃんが知らない事なんて無いんじゃないのかってぐらい、話した。
優しいこのドラゴンは俺の話を良く聞いてくれたし、何か助言が欲しい時には的確な返答をしてくれる。

そんな俺の1番信頼の置けるドラゴンはこの城の前で別れたはず。
門番その他もろもろに「ドラゴンの城への立ち入りは許可されません。」って言われて。
なのに、どうしてここに居る？

『我と主を物理的距離でもって引き離したのはまだ耐えられよう』

不思議な声が耳に届く。
ミドリちゃんの声は脳に直接響くような不思議な声をしている。
いつもだったら歌うように綺麗な音を響かせるのに、今日はおどろおどろしい音である。
初めて聞いたその音に思わず背筋に冷たいものが走る。

『しかし、我らの絆を断ち切ろうなどと笑止！』
「・・・・そのような子供より、優秀な騎士や魔道士を宛がってやろうというように。何が気に入らない。」
いつの間にか王様が俺への対応をしていた時のように玉座に座っている。
王様の言葉にフンッと嘲るように鼻を鳴らす。

『愚かしい。貴様ら如きのもとに下ると思うておるのか。』
「そうか。ならば害悪の芽は取り払うべきであろう。」

王様のその言葉が引き金となった様に、既に立ち上っていた衛兵たちがミドリちゃんに飛び掛った。
鋭い鉤爪と強靭な尻尾で飛び掛った衛兵たちを床に沈めたミドリちゃんの口の横が光るのが分った。
ドラゴンのブレス。
正直、ここでブレスなんてやられたらヤバイ。
もう本気で　ヤ　バ　イ　。

「ちょ・・・ミドリちゃんストップ！ヤバイ！まじヤバイから！室内でブレスなんてしうぇぇぇえええぇぇぇぇぇぇえぇぇぇぇええええぇぇぇぇぇぇぇえええええええええ！！！！」

ブレスを止めようとミドリちゃんの側まで俺史上最速ダッシュ。そしたらなんとミドリちゃんの前足にガッシリ掴まれて、そのまま壁の穴から一緒に空飛びました。

雲ひとつ無い空って綺麗ねー。あははー。うふふー。じゃないっっっ！

「ミドリちゃぁぁぁぁぁぁぁああぁぁん！なに！？どうなってるの！？」

『逃げよう、マサト。あと、喋らない方がいいよ。』

「みふぇっっ」

ミドリちゃん、なんで？って言おうとしたら思いっきり舌を噛んだのは言うまでも無い。

そのままミドリちゃんに掴まれたまま、幾つかの山越え谷越え。

そして今に至るというわけだったりする。

森の泉の側にミドリちゃんと降りた時、俺はふらふらとした足取りで泉へ向かい、緊張で乾いた喉を潤した。

謁見の間であった事と、ミドリちゃんに掴まれて空を飛んだ事のダブルパンチで喉が大変なことになってた。

若干咽ながら喉を潤すと、今度は現金な事に腹の虫が鳴った。

どんな時でも、お腹は空くんです。

『何か食べれる物があるか見てくるね。ここから動いちゃダメだよ。』

「あ・・・ミドリちゃん・・・」

ミドリちゃんは俺のために食べ物を探しに飛び立ってしまった。
ミドリちゃんは優しいなぁ。なんて思いながら泉の傍らで体育座りをして待つことにした。

03―そして再会

とても心地いい風も、暖かな木漏れ日も普段だったら「シエスタって素晴らしい！」
といって大の字で寝転がるところだが、今はそんな気持ちにはなれない。

体育座りをした格好のまま横に倒れる。
膝を抱えて目をぎゅっと瞑る。

結婚・・・とか言ってたけど、何でだろう。
もとの世界に戻してくれるって話はどこにいったんだろう。
置いてきちゃった2人は大丈夫かな。
ミドリちゃんどこ行ったんだろう。
お腹すいたなぁ。

なんてことをつらつら考えていると、
シャリっという微かな音と「やぁっと見つけた～！」という間延びした声が耳に届く。
はっとして上半身を起すと、5メートルぐらい先に金髪の男性。
そして、その男性に腰を抱かれた赤毛のグラマラス美女の2人。

「アレクさんに・・・ヴァネッサさん？」
「見つけられてよかったぁ～。」
「ちょっとあんた大丈夫なの！？・・・あのおチビはどこいったのよぉ！」

赤毛のグラマラス美女ことヴァネッサさんに肩を鷲掴まれてグラグラと揺さぶられる。

・・・ちょっと気持ち悪くなってきた。うっぷ・・・。
そんな様子に気が付いた金髪の男性ことアレクさんヴァネッサさんを止めてくれた。
よかった。悲惨なことにならなくて。うぅ・・・。

ヴァネッサさんを後ろに押しやり、俺の前に膝をついて目線を合わせてくれたアレクさん。
特に何か言うわけではないけど、垂れ目気味の目が『大丈夫？』と言ってくれている。

アレクさんは世界で5本の指に入ると言われている魔法使い。
本人は料理が趣味のしがない魔法使いだって言ってるけど。
ミドリちゃんが喋れるようになった時に、「魔人を封印するなら魔法使いが必要」だって言われて、
その時いた街から一番近い所に住んでいたのがアレクさんだった。
その街の人たちに”隠者の塔”と呼ばれている塔に住んでいたんだけど、
どれだけ怖い人が住んでいるかと思ったら、垂れ目気味で長めの金髪を緩く肩口で縛った若い男性だった。

これまでの経緯を話して力を貸して欲しい旨を話すと、アレクさんは涙目になって協力するって言ってくれた。
アレクさんはこっちが心配してしまうほど情に厚く、涙もろい。
後々、どうして”隠者の塔”なんてところに住んでいたのか聞くと、今まで色々な人に騙されて、傷ついて、人と係わり会うのが怖くなったと少し悲しそうに教えてくれた。
人ごみとかも苦手らしく、街中ではいつも俯いている。
イケメンなのに勿体無い。

そのアレクさんの後ろで仁王立ちしているのがヴァネッサさん。

こう見えても俺ぐらいの大きさがある大剣を振り回すことの出来る剣士だったりする。
アレクさんと旅をし始めて暫く経ったある日、
街の中でガラの悪い人たちに因縁をつけられていた時に助けてくれたのがヴァネッサさんだった。
全身正義感で出来ている！って感じのする彼女はガラの悪い連中を伸した後、
魔人という強い相手と戦ってみたいため、俺たちの旅の一員となった。

・・・ということになっているけれど、本当はアレクさんに一目惚れしたんで一緒にいたいそうだ。
アレクさんが居ないときにヴァネッサさん本人から「仲を取り持って欲しい」と頼まれたからね。
曰く、顔が好みだった上に、アレクさんの料理（これがまた絶品！）に胃袋もガッツリつかまれたそうな。
男は胃袋で掴めって言う言葉は聞いたことあるけど、それって女の人にも有効なんだー。って思ったな。うん。

ぼんやり2人を見ていたけれどはっとした。そうだ、2人を謁見の間に置いてきちゃったんだ！
「ご、ごめんなさい！2人を置いていっちゃって！」
ガバッという効果音がつきそうなほど頭を下げた。
あんな所に置いて行っちゃって絶対2人とも怒ってるはず・・・！！
怒鳴られるのは嫌だーって思っていると頭をポンポンって撫でられる。
「大丈夫ですよ。ねぇ、ヴァネッサさん。」
「そうよ！別にあんたが気に病むことなんて無いんだからね！」
いつもと変わらないアレクさんの笑顔にツンっとしているけれど心

配そうなヴァネッサさんの顔。
心配されているんだと感じて若干涙目になる。
ちくしょう。元々涙もろいんだよ。文句あるか！

「それはそうと、あんた。アレ封印したらもとの世界に戻れるんじゃなかったの？
なんで結婚することになってんのよ。」
仁王立ちのヴァネッサさんが眉間に皺を寄せて問いかけてくれば、
アレクさんも「それは僕も吃驚しましたよ～。」と若干戸惑い顔になりつつ聞いてきた。

そんなの俺が知りたい。
そんな俺の心境が表情に出ていたのか、２人は俺を見ながらため息をついた。

０４_不幸の手紙

「そうそう、お手紙を預かってきたんですよ。」
そういって鞄を漁るアレクさんを見つめる。
手紙なんて、日本に居た時も年賀状ぐらいしかもらった事無い。
しかも、この世界で俺宛に手紙を渡そうなんて人は居るはずが無い。
さっきまで居た場所が城の謁見の間であるということもあって不吉な予感がする。

あったあったと渡された手紙は若草色の封筒に入っている。
それもしっかりと蝋印までされていた。
「アレクさん。」
「ん？なんだい。」
「つかぬ事を伺いますが・・・。これ、どなたから預かりました？」

アレクさんはにこー。と微妙な笑みを浮かべて「カトリーナ様。しかも姫様直々に手渡し。」と
語尾に音符（♪）が付きそうな声色で言われてしまった。
正直こえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ。

怖いからと言っても読まないわけにもいかないので、早速読んでみることにした。

が、

「アレクさん。」
「ん？なんだい。」
「・・・・読めません。」
「・・・・」

便箋にはミミズがのたくった様な字（俺基準）が綴られている。
俺はこの世界の文字が読めない。
だけど、旅の合間にアレクさんに文字を習っては来た。
ちなみに、アレクさん曰く識字レベルは大体5歳児ぐらいまでレベルアップしているらしい。

少なくとも、英語とかのアルファベットで言うブロック体のような字は大体読めるようになった。
店の看板とかに書いてある筆記体みたいなのも時間と綴り表（アレクさん作）があればどうにかいける。
俺スゴイ！やれば出来る子！！
なんて自画自賛していたけれど、この手紙をみて自画自賛していた自分を殴りたくなった。

ガックリしながらアレクさんに見せると「達筆ですね～。」なんて言っている。
そうか。このミミズ字は達筆なのか。

「流石にこれだとマサト君にはキツイですね。代わりに読んでもいいですか？」
「・・・どうぞ。。」

～

異世界の来訪者　様

風香り、緑豊かなる季節如何お過ごしでしょうか。

申し送れました。私、レインドル王国第2王女カトリーナ・ディ・ドロテア・レインドルと申します。

さて、早速本題に入らせて頂きたく存じます。
異世界の来訪者様も我が父である国王の決定に驚愕なさったことでしょう。
貴方様の意向も考慮せず、あのような振る舞いをしたことをお許しください。

我が父、ならびに大臣達は魔人を封印した貴方様の力をみすみす手放したくない様です。
私と婚約させ、王族に魔人を封印した者を取り入れる事が出来たならば、
我が国から他国への影響力も高まると思っております。

また、旅立ち前に我が父は無事に帰還なさった後に、貴方様を元の世界に戻すと約束なさいました。
しかし、それは我が国にいる魔道士を全て集めても不可能である。
魔法を使ったとしても、また別の世界に飛ばしてしまうであろう。
と聞き及んでおります。

さらに、貴方様の捜索隊、及びと貴方様を攫ったドラゴンの討伐隊を結成しようとしております。
お気をつけなさいませ。

レインドル王国第2王女
カトリーナ・ディ・ドロテア・レインドル

〜

「ま」
「ま？」
「ま　じ　か　よおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

うあぁぁぁぁぁあああぁぁ。と頭を抱えて転げ回る俺を観てアレクさんが驚いた顔をしている。
不断なら俺が変なことしても「いつものことね。」って顔をするヴァネッサさんまでアレクさんと同じ顔。

でも、コレだけは言わせてくれ。
「どうしてこうなったぁぁぁあああぁぁぁあぁぁぁあああああぁあぁぁぁあ！！！」

０５＿俺自身の為に

一通り騒いで疲れて冷静になってきた。と思う。
そんな俺に追い討ちのように「あ・追伸もあります。」とアレクさんの声。

「追伸。私は隣国の王子と婚約しております。
貴方様が城にお戻りになると私と隣国の王子との婚約が破棄されます。
頑張ってお逃げ下さいませ。」
「ジーザス！！」

何だよこれ。
踏んだり蹴ったりを通り越して、踏んだり蹴ったり踏み潰したり埋めたり沈めたりって感じじゃないか！
今にも頭を抱えて転げ回りそうな俺を落ち着かせようとするヴァネッサさん。
どうどう。って俺は牛とか馬じゃないよ！

『マサト、どうしたの？』

覆いかぶさる様に音も無く降りてきたミドリちゃんに俺は泣きついた。
困惑するミドリちゃんに俺はさっきアレクさんに読んでもらった手紙の内容を話した。

『そっか。マサト、どうするの？』
「どうするの・・・って・・・。」

どうしよう。
本当に、どうしようと言う言葉しか頭の中から出てこない。
そんな俺にミドリちゃんは右前足を出して腹ごしらえしないと考え事出来ないっていってたでしょ。
と果物を渡してきた。
俺の好きな、リークの果実。食感はリンゴみたいだけど、味は桃って感じの果物だ。

「おや、随分いっぱい取ってきましたね～。」
『2人もそろそろ来てるかなって思ったから。』
「やるじゃん、おちび。」

リークの果実を受け取ったアレクさんは剥きますね。といって泉で果実を洗い始めた。
俺は「ウサギさんで！」と現金にもリクエストをすると、
アレクさんがニッコリ笑ってくれた。

ミドリちゃんに引っ付いたままお腹が空いて回らない頭で
これからどうしようかと考えていたらヴァネッサさんに頭をわしわしとかき混ぜられた。
「余計なことは考えない！これからどうするかは食べてから決めればいいでしょ。」
「ヴァネッサさん・・・。」
「1人で考えなくてもいいんだし、私もアレクもあんたが引っ付いてるおちびもいるし。
場数だけなら私たちの方が経験多いんだからちょっとは頼りなさいっ！」

そう言ってにやっと笑うヴァネッサさんに「はい。」と答えると
「いい返事ね！」といってまた頭をわしわしとかき混ぜられた。

そうやっているとお皿に剥いたリークの果実を載せたアレクさんが近寄ってきた。
もちろん、リークの果実はウサギさんになっている。
身体の大きさを小さく変化させたミドリちゃんを俺は膝に乗せ、みんなでリークの果実を食べ始めた。
瑞々しい果実に齧り付くと口の端から果汁がこぼれそうになる。
思わず次々手を出し、お皿の上はいつの間にか空になっていた。
アレクさんにお茶の入ったコップを渡され、手際がいいなぁ。と感心お茶をすする。

「さて、これからどうしましょう。」
「戻ったところで結婚させられるんでしょ？
しかも、おちびの討伐隊まで結成しようとしているみたいだし・・・・。」
アレクさんが切り出した話題に、ヴァネッサさんが俺を気遣うような目線をよこしながら言う。
そう、今後の身の振り方を考えなきゃいけないけど、
俺にとっては自分のことよりもミドリちゃんのことが心配だ。

お姫様の手紙に書いてあった”ドラゴンの討伐隊”の件。
なるべく意識しないようにしていたけれど、結構ミドリちゃんに依存している自分が居る。
この世界で一番信頼を置いている相手。
もし、ミドリちゃんになにかあったら・・・。

コップを脇に置いて膝の上のミドリちゃんを撫でる。
気持ち良さそうに目を細める様を見ていると心が落ち着く気がする。
ミドリちゃんを守らないと。なんて心の中で密かに拳を握り締めて

いたが、
俺の手から逃げるようにミドリちゃんが降りた。
普段なら俺が撫でるのを止めるまで膝の上にいるはずのミドリちゃんの行動に
思わず行方を失った手が宙に浮く。

『私は、マサトがやりたい事をすればいいと思う。』
そう言ったミドリちゃんは俺の前に座り、凛と俺を見つめてくる。

『マサトが戦えと言うのなら私は戦う。
もし、マサトが死ねというのなら・・・・・・死ぬわ。』
「っ・・・！そ、んなこと、言わないっ！絶対にっ！！」
ミドリちゃんの言葉に焦って身を乗りだしていった俺に
私もまだマサトと一緒にいたい。と柔らかな声色でミドリちゃんが
答えた。

良かった。
でも、これって俺のためなら何でもするっていう意思表示・・・とか？
・・・うん。これからはミドリちゃんに何か言う時はちゃんと考えてからにしよう。
そんな事を心のメモに書きとめていると、「マサトくんは何をしたい？」と
アレクさんが柔らかな声で聞いてきた。

「おれの・・・したいこと。」
「ええ。これは君の問題ですからね。
もちろん、僕らも出来る限り手助けはしますよ。」

ねぇ、ヴァネッサさん。というアレクさんにヴァネッサさんは当然よ！と答える。
そんな2人と目の前のミドリちゃんに目をやり考える。
俺のしりたいこと。それは・・・。

「俺、は、・・・家に帰りたい。」
そう言った俺の言葉にミドリちゃんの瞳が悲しそうに揺れた気がした。
だけど、俺は家に帰りたい。
この世界は俺の世界じゃない。
家族も、友達も、みんな。みんなあっちにいる。
だけど、

「家に帰りたいのは本当。
だけど・・・いままで通りにミドリちゃんと、アレクさんと、ヴァネッサさんと。
皆で旅も、したい。」

家に帰りたい。
皆と旅をしたい。
矛盾した思いがある。

この世界に来た時は散々な目に合ったけど、
みんなにミドリちゃんに出会ってからは楽しいと思えることが多かった。
たしかに、今までの生活から一変した旅を送ることになったけど、
そこには喜びがあった。

ミドリちゃんとお菓子を分け合って「おいしいね。」って言い合ったり。

アレクさんのご飯をお腹一杯食べさせてもらったり。
ヴァネッサさんに剣の稽古をつけてもらったときに、「剣筋が良くなった。」って褒めてもらったり。

些細なことだけど、俺にとって嬉しい、楽しいと思えることばかりだった。
だから、今の状態を崩したくないというのも俺の本音だ。
カップに残ったお茶を飲み干す。
そんな俺のカップにアレクさんは新しくお茶を注いでくれた。

しばらくの沈黙。
アレクさんの持つ茶器がそれぞれのコップにお茶を注ぐ音しかしない。
誰も、何も喋らない。

「だったら、両方やればいいじゃない。」
沈黙を割いたのはヴァネッサさんだった。
両方やればいいってどういう事？

「ああ、いい考えですね。」
「でしょう？」
「じゃぁ、僕のオススメとしてはまずは隣の大陸に移動する。ですね。」
「いいわね。こんなところに何時までも居る義理なんて全く無いわ。」

俺を置いてどんどん話が進んでいく！
ちょっと待って、どういうこと！？と焦って聞くと2人して
「何？別の大陸には行きたくない？」なんて返答がきた。

そうじゃなくて！

「両方やるってどういう意味ですか！？」

「何よ、あんた。分んないの？」

では、お姉さんが教えてあげよう！とヴァネッサさんは右人差し指を立て、

その手を俺にずいっと伸ばしてきた。

「さっきまでの会話で分ってたと思ったんだけど・・・ここはそう！あんたが元の世界に帰る方法を見つけるために、この面子で旅をするのよ！」

おほほほほ。これであんたの望み2つともクリアしたわー！

なんて高笑いしているヴァネッサさんに苦笑しつつもアレクさんまで頷いている。

「え・・・？いいんですか？」

まさか、”皆で旅をしたい”が2人に受け入れられるなんて！

驚いている俺に向かいアレクさんが「もちろんですよ。」

「僕なんて、また塔に戻って引き篭もるぐらいしかやることありませんし。」

「面白いことになりそうだし、もちろん付いて行くわ！」

さらには俺の服の袖を口で加えて引っ張るミドリちゃんを見ると、

『マサト、一緒にいられるね』なんて言ってくる。

そうこうしているうちに、2人と一匹は俺を置いて相談し始める。

召喚術に詳しい魔法使いが隣の大陸に居るはずだーとか、

その大陸に行く船はこの港町から出ているはずだーとか、

変装とかしたほうがいいのかなー？とか、どんどん話が進んでいく。

そんな様子を見ながらお茶を飲む。

木漏れ日が気持ちいい。最初にこの場所に来た時よりも心が軽くなっている。
そろそろ帰りたかった。
だけど、

「しばらく、このままで」

固まって相談していた皆に呼ばれる。
これから、どこに行くか。
何をするのか。選択するのは俺自身。
だけど、頼りになるミドリちゃん、アレクさん、ヴァネッサさんという仲間が居る。

俺はコップの中のお茶を飲み干し、皆に近寄る。
俺自身のための選択をするために。

０５＿俺自身の為に（後書き）

これにて当連載の本編は完結です。
読んで下さりありがとうございます。
次にドラゴンのミドリちゃんの話を載せる予定ですので、
よろしければ読んでください。

番外編：好奇心、そして今は―０１（前書き）

本編に出てきたドラゴンのミドリちゃん視点の話です。

番外編：好奇心、そして今は―０１

ドラゴンと言うのは総じて長寿である。
長寿というより、寿命がないものなのだろう。
事故、または第三者に殺されない限り生き続ける種族だ。

また、ドラゴンには血縁関係というものが存在しない。
ドラゴンの数は一定であり、一頭がその生を終えれば新たな一頭の生が始まる。
どのように生が始まる、即ち産まれるのかはドラゴンである私たち自身も理解していない。
気がついた時には、私は私であった。

このドラゴンである私は現在、小さく柔らかい者達から『ミドリ』と呼ばれている。
小さく柔らかい者達の中でも更に小さき者に名づけられた。
私は私である故、名というものは必要ない物であった。
しかしこの名、『ミドリ』という名を私は気に入っている。
小さく柔らかい者達の中の更に小さき者、マサトに名付けられたからであろう。

マサト。私の大切な存在。
出会った時にはここまで私の心を占める大切な存在になるとは思わなかった。

―

私とマサトが出会った日、私は最初に私というものを意識した場所、森に来ていた。
私が私である事を意識した時に小さな芽を出し、懸命に太陽の光を浴びていたそれは、
今ではしっかりとした幹を持ち、甘い芳香を漂わせている果実を実らせていた。

それを見た私は嬉しくなり、鼻歌を歌っていた。
そんな時にマサトが現れた。

ガサリと音がした。
目を向けるとそこには大きく目を見開いた薄汚れた小さな生き物がいた。
確かこの生き物は”人間”と言ったか？などと考えていると、
この小さな生き物は私を胸に抱え走り出した。

何事かと思えば、この小さな生き物は魔獣に追われていたらしい。
抱えられながら魔獣の様子を伺えば、あまり賢く無さそうであった。
私は魔獣を惑わせるよう森に命じ、ついでに肉食性植物の方に向かわせるようにしておいた。

たまにはあの肉食性植物たちにも腹一杯喰わせてやるのも良いだろうと思っていると、
不意に体の感覚がおかしくなった。
私を抱えていた小さな生き物が足を踏み外したようだ。

少し高めの斜面から転がり落ちる。
多少の事なら傷つかないと解っているが、ここで放り出されたら面倒だと思った。
しかし、この小さい生き物は私を胸にしっかりと抱きしめ、私を守

ろうとしているようだった。

困惑した。

我々ドラゴンは強い。
その強さ故、戦いを挑んでくる者たちは少なくない。

また、ドラゴンの記憶、及び知識は特殊である。
自分と言うものを意識した時、それまで生きてきたドラゴンたちの記憶及び知識も自分のものとなる。
今まで私という存在で生きてきた記憶、それまで生きてきたドラゴンたちの記憶、
その両方を合わせても守られるのは初めてだった。

斜面を滑り落ちると、小さな生き物は傷だらけだった。
その小さな生き物は私を確かめると、顔を変に歪めて「無事でよかった。」と言った。

この生き物は何なのだろうか。今まで会ったことがない。
気付けば小さな生き物の傷を治していた。
傷を治すと小さな生き物は最初に会った時のように目を大きく開いている。
しかし、突然我に返ったよう私の頭を撫で、
「君が治してくれたんだよね。ありがとう。」と先ほどよりも変に顔を歪めていった。

その顔を見ていると天気の良い日に木陰でまどろんでいる時のような心地よさを感じた。
しかし、立ち去ろうとしている小さな生き物を見ると説明の付かない焦燥感が溢れた。

このまま立ち去らせてはいけない・・・！

そして私はこの小さな生き物について行く事にした。

途中で追い払われたりもしたが、ひたすら付いていくと
小さな生き物も追い払うのを諦めたらしく私を抱えて一緒に行こうと言った。

「一緒に行くなら君の名前もないといろいろ不便だよね。」
「綺麗な緑色だし・・・君の名前は『ミドリ』！俺はマサトって言うんだ。ミドリちゃん、よろしくね！」

そう言ってマサトは変に顔を歪めて――後にこの表情は”笑み”であると知った――私を見やった。
私を見つめるマサトの表情、そしてマサトの瞳に写る私の姿。
落ち着かないが、どこか心地よさを感じる。
この不思議な感覚が何であるかを確かめるため、私はマサトと行動を共にする事にした。

番外編：好奇心、そして今は―０２

マサトと出会ったことで私は様々なことを知った。

旅の最中で食した乾燥肉。
自ら口を付けようなどと思えないその酷い味の乾燥肉もマサトと一緒なら美味しく感じた。
少しでも私に多く食べさせようとするマサトの優しさと分け合って食べた時の美味しさを知った。

突然の雷雨。
私は体の大きさを自由に変えられるため、翼の下にマサトを入れようかと思ったが、
それよりも早くマサトの懐に入れられた。
「ミドリちゃん、寒くない？」と私を気遣うマサトの温かい瞳と膚の温もりを知った。

マサトと一緒に見た夕焼けの美しさ、街で買い分け合った焼き菓子の味、
途中立ち寄った村の祭りの喧騒、マサトに抱かれながらまどろむ心地よさ。

マサトと出会って経験したことは、
今までの自分の生はなんと味気ないものであっただろうかと思ってしまう程であった。

そうして、マサトと出会うまでは考えもしなかった事まで考えるよ

うになってしまった。
もしも、私が、マサトと同じ、”人間”で、あったなら。と。
もし私が人間であったら、この鋭い爪で、この堅い鱗で
マサトを傷つけてしまわないだろうかと気に病まずに触れることが
出来ただろう。
もし私が人間であったら、マサトが悲しい時に力いっぱい抱きしめ
ることが出来ただろう。
もし私が人間であったら、街で見かけた”コイビト”達の様にマサ
トと手を繋ぐ事が出来ただろう。

しかし、同時に私は自分が”ドラゴン”であるという事実に感謝し
た。
この鋭い爪で、この堅い鱗で、この身体から溢れる魔力でマサトを
脅かすものから守ることが出来る。
ドラゴンであるこの私だからこそ、マサトの役に立てるのだと私は
胸を張って言う事が出来る。

マサトと共に居られることは大変喜ばしい。
反面、いつまで共に居られるのか、そして別れを想像すると翼をも
ぎ取られるかの如き痛みが胸に走る。
いっそのこと、喰らってしまおうかと考えた事も一度や二度ではな
い。
しかし、喰らってしまったらマサトの笑顔も温もりも感じ取る事が
出来ないという事実が
私を未だ踏みとどまらせている。
何か良い方法がないかと他のドラゴンの記憶を探っていると”契約

”というものに行き着いた。
ドラゴン同士、またはドラゴンと多種族を結びつける絆を魔力で以って構築する方法。
他のドラゴンの記憶だと”契約”は体力及び魔力の消耗に加え、ほとんどの場合、不快感、または拒絶感が伴うものらしい。

マサトに不快感や拒絶感を伴うものを強制は出来ない。
出来ればお互いを結ぶ”絆の契約”をしたかったが、もしそれを拒否された時、私は本当にマサトを喰らってしまうかもしれないと思った。
私は、私からマサトへの”従属の契約”を一方的に結ぶ事にした。
これは私への負担が大きいがマサトへは殆ど影響が無いはずだ。

決行したのは森の動物すら寝静まった夜。
穏やかに眠るマサトの額へ鼻先を付け契約を実行した。
不快感や拒絶感が私を襲うはずであった。
しかし、私の身に起きたのは包み込むような暖かな光が身体を包み込んだ事と、
身体の奥が震えるような快楽だった。

私は戸惑い記憶を探ると、
どうやら契約時に感じる感覚は、契約を結ぶ者の相手への感情。
言ってみれば、相手に好意を持っているか持っていないかで大きく変わるらしい。

しかし、私のような経験をした者は他に居ないようだ。
他の誰も経験したことの無いことを経験したのだ！と少し嬉しくなる。

そして想う。

もし、マサトに望まれ”絆の契約”をしたならば、どんなに満たされるだろうかと！
互いに繋がれているとなれば、きっとマサトが元の世界に帰ってしまっても
この永遠とも言える生を耐えられるだろう。
おそらく。きっと。

帰る前に、一度願い出てみよう。
私と”絆の契約”をして欲しいと。

そう心に決め、私は”従属の契約”をした際の感覚の余韻に浸るのだった。

番外編：好奇心、そして今は――０３

思っていたよりもあっけなく魔人の封印に成功することが出来た私たちは
マサトを召喚した者たちのいる城へ戻る事になった。

マサトに”絆の契約”を願い出ようと思っていたが、
願い出る機会をなかなか得られず、ついには城にまで着いてしまった。

初めて見る人間の城は私たちドラゴンにとっては大変脆いものに感じられた。
小さく柔らかい者達にとっては「強固な城」なのだろうと、
価値観の違いをまざまざと見せつけられたような気がした。

城に着くとマサトに抱きかかえられている私の姿を認めた兵士たちが慌てふためいた。
ドラゴンはあまり人の前には姿を現さない。
異なる種族同志、顔を合わせれば争いになることが多かったからだ。
そんなドラゴンが人の腕の中に大人しく抱かれているという状況が特に異様なものだったろう。

城から偉そうにローブを着た者が出てきて、私とマサトをじっとりと嫌な目で見つめた。
兵士たちの会話からして城付きの魔道士なのだろう。
嘗め回すように不躾な視線が不快だ。
目線、妙に撫で付けられた白髪の髪、趣味の悪いローブ。
何から何まで気に食わない。

よくぞ御戻りになりました。それにしてもその腕のなかのドラゴンは立派な云々。
などと態度と一致しないような事がよく口から出てくるものだと思っていたが、
マサトは私が褒められて嬉しかったらしく穏やかに応対していた。
この子はミドリです。とても優しいドラゴンです。と私が喜ぶ事を言う。
それに加え、若干頬が高潮しているマサトの様は大変愛らしい。

しかし、城付きの魔道士がマサトと私にべたべたと触るのは気に食わない。
マサトから離れろ愚か者と喉元まで出かかったぐらいだ。

そろそろブレスを見舞ってやろうかと思ったときにやっと離れた奴は更に気に食わない事を言う。
城にはドラゴンを入れないと言ってきた。
やはり、ブレスを。とも思ったが、ここで暴れてマサトの評判を落とす事も無い。

仕方なく私はマサトから離れ、その辺りを飛んで暇を潰す旨を伝えた。
申し訳なさそうなマサトの首元に顔を摺り寄せ甘えた声をだす。
しばし離れるのだ。これくらは許されよう。

謁見の様子は後で教えるね。と優しく私の喉元に触れるマサトに頷き、私は空へと飛び立った。

一一

マサトに着いて行けなかったのは残念だったが、
その気になれば城の様子など手に取るように分かる。
しかし、マサトが後で教えると言ってきたので私は私で空の散歩を楽しもうと思った。

そういえば今の時期はこの城から北の方の森で花が咲いているはずだ。
可憐な花で、きっとマサトも気に入るだろう。と思い、
花をプレゼントするためにその森へ行こうとしたその時だった。

全身を包み込む不快な魔力。
思わず空中で体制を崩してしまった。

なんと言う不覚。
この不快な感覚は先ほどの城付きの魔道士のものに違いない。
先ほど触ったときに私の身体に力を注ぐ為の印をつけていたのだろう。

些細な力ゆえ、あまり気にする程度のものではなかった。
むしろ、こんな力しか人間にはないのかと思わず嘲笑ってしまった位だ。
しかし、全身を包み込む力の流れが変わるのを感じた。

思わず全身の鱗が逆立ってしまうような感覚。
私とマサトの間で成した”従属の契約”を断ち切ろうとしている。

許せない！許せない！許せない！許せない！許せない！許せない！

私とマサトの間の契約を断ち切ろうなどと許せない！
怒りのあまり咆哮を上げる。
その怒りをそっくり返すかの如く、契約を断ち切ろうとしている魔力を私の怒りを込めた魔力も乗せて相手に返す。
返すついでとばかりに、相手の記憶領域にも踏み込む。
中を全て探り、分った事は２つ。

一つはこの愚か者共はマサトを騙している事。
マサトを元の世界に返すと約束しておきながら、
その方法を探さないまでか婚姻という形でこの国へ縛ろうとしている。

そして、もう一つは私をマサトから引き離し国の騎士、または魔道士と契約させようとしている事。

ドラゴンも随分と甘く見られたものだと思わず嘲う。
それよりも、マサトが元の世界に戻る術がこの場に無いのであれば、この場に留まる理由などない。

ついでに、踏み込んでいた城付きの魔道士の記憶領域を引っ掻き回しておく。
これで暫くは起き上がれまい。
様を見ろ。
私とマサトを離そうとするとどうなるか、身を以って思い知るが良い。

さぁ、いこう。
マサトの元へ。
私は城へと引き返すため、宙で身を翻した。

一一

マサトを取り戻し逃げる事に成功した後、事態は私にとって良い方向へと向かった。
マサトは城に戻るつもりもない上、旅を続けたいと言った。
その言葉に私は安堵した。

まだ共に居られる。と。

これからの事を相談しているマサトを見つめ思う。
折をみて”絆の契約”を交わすことを願い出よう。

そして、マサトが元の世界に帰るとき。
その時は私の生を終わらせてもらおう。

今回の事で理解した。
彼と離れることなど出来ないと。
マサトと離れてしまえば、きっと私は狂ってしまう。
狂ったドラゴンはこの世界の脅威となる。
狂う前にこの生を終わらせなければならない。

終わらせるのであれば彼に。
マサトの優しく暖かい手で。
そしてマサトの記憶に私という愚かな狂ったドラゴンが存在したという記憶を。

私は彼の声を聞きながら、膝の上で丸くなる。
マサトとのこれからを思い描いて。

番外編：好奇心、そして今は―０３（後書き）

これにて『そろそろ家に帰りたいです』は完結です。
この話の続きも大まかに考えているので、またどこかでお会いするかもしれません。
それでは、ここまで読んで下さりありがとう御座いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3984u/

そろそろ家に帰りたいです

2011年7月23日00時18分発行